

身を正して子に感得させる

「私の幼児教室では6人を1クラスにして指導してあるが、クラスによっては6人の間に著しい較差があって、その為一斉指導が困難である」とは既に述べた所ですが、それが“知識”や“智能”の較差ならまだ扱ひ易いのですが、問題なのは“品性”のそれです。品性が高いと、高い智能や豊かな知識が世の為人の為に働くけれども、品性が下劣だと、智能が高く知識が豊かであればある程それを下卑た事に使ふから始末が悪いのです。

所が、今の親たちは“智能”や“知識”には敏感で、これを少しでもよく養ひ育ててくれる所があると聞くと、それこそ「千里の路も遠しとせず」で、また莫大な費用をも惜まないでこれを求め、それに委託しようとしてゐます。然し、それよりもずっと大切な“品性”については実に鈍感で、放ったらかしにしてゐるのです。正に「本末顛倒」であります。「本立ちて道生ず」と言はれてゐる通りで、品性の高い人は学習して倦む事が無く、どんなに知識が豊かであらうとも満足せず、また他に誇らず益々努力して止まないのです。だから、絶えず進歩して終には成功し、自然と周囲の尊敬を集めます。所が、品性の卑しい者は僅かな知識で満足し、これを鼻に掛け、地道に努力して学習する事をしません。だから、

一時的には成功する事があっても実力がそれに伴はないから終には馬脚を現すに至るのです。

その品性の較差が3歳の幼児に現れてゐるのです。然もそれが「三つ子の魂百までも」であるから何とも恐い事ではありませんか。品性の教育は「口で教へて解らせる」ものではありません。親が自分の身を正して、それを子に感得させるものです。だから、私は「教育の原点は家庭にあり」と言ひ、「努力して行ふ善の奨め」を説いたのです。わが子に良い手本を示さうと努力する事こそ、真の「親の愛」といふものでせう。

私は幼い時、何か母に不満を懐き、その腹癒せに迷惑になる事をしてやらうと思ひ、紙を細かく千切って客間に散らかした事があります。所が、母は客間に入って来てそれを見るなり「勲は器用だねえ。お母さんにはとてもこんなに細かくは千切れない」と言ったのです。私は途端に真赤になって俯いてしまひ、母と一緒にそれを持ち集めた事を、60数年経った今でも鮮かに覚えてゐます。そして、母の愛情の大きかった事を有難く思ふと同時に、親たる者はかうでなければならぬと常に自省して来ました。

所が、今の母親たちを見てみると、子供を高い所から眺める事が出来ず、子供と同じ立場に立って言ひ争つてゐる親が多いのです。本人

は説教してゐるつもりかも知れませんが、^{はた}端から見れば正に口論でしかありません。そもそもわが子を理屈でやり込める事くらゐ有害無益な行為は無いのです。それが解らないらしいのですが、これではとても高い品性が磨かれる訳がありません。

ついでに言ひますが、子供の善行を褒めるのに物や金を与へる事くらゐ子供の品性を卑しくするものではありません。貧しかった昔はそんな事をする余裕がありませんでしたから問題が無かったのです。今は余裕があり、又それは一時的には効果がありますから、物や金で子供を操る親が多いのです。こんな事をしたら、子供が金や物で動かされる、品性の卑しい人間になるのは当然です。アメリカは豊かだけれども、こんな愚かな事をする親は少ないのです。